

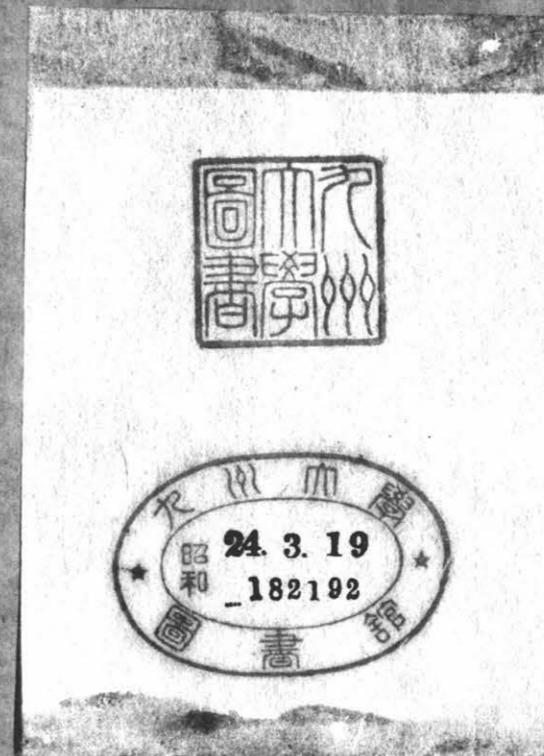
油
か
尺
二



548
6

0 | 150 cm | 10 | 5 | 0 | 1 | 0 | 5 | 10 | 15 | 20 | 25 | 30 | 35 | 40 | 45 | 50 | 55 | 60 | 65 | 70 | 75 | 80 | 85 | 90 | 95 | 100 | 105 | 110 | 115 | 120 | 125 | 130 | 135 | 140 | 145 | 150 | 155 | 160 | 165 | 170 | 175 | 180 | 185 | 190 | 195 | 200 | 205 | 210 | 215 | 220 | 225 | 230 | 235 | 240 | 245 | 250 | 255 | 260 | 265 | 270 | 275 | 280 | 285 | 290 | 295 | 300 | 305 | 310 | 315 | 320 | 325 | 330 | 335 | 340 | 345 | 350 | 355 | 360 | 365 | 370 | 375 | 380 | 385 | 390 | 395 | 400 | 405 | 410 | 415 | 420 | 425 | 430 | 435 | 440 | 445 | 450 | 455 | 460 | 465 | 470 | 475 | 480 | 485 | 490 | 495 | 500 | 505 | 510 | 515 | 520 | 525 | 530 | 535 | 540 | 545 | 550 | 555 | 560 | 565 | 570 | 575 | 580 | 585 | 590 | 595 | 600 | 605 | 610 | 615 | 620 | 625 | 630 | 635 | 640 | 645 | 650 | 655 | 660 | 665 | 670 | 675 | 680 | 685 | 690 | 695 | 700 | 705 | 710 | 715 | 720 | 725 | 730 | 735 | 740 | 745 | 750 | 755 | 760 | 765 | 770 | 775 | 780 | 785 | 790 | 795 | 800 | 805 | 810 | 815 | 820 | 825 | 830 | 835 | 840 | 845 | 850 | 855 | 860 | 865 | 870 | 875 | 880 | 885 | 890 | 895 | 900 | 905 | 910 | 915 | 920 | 925 | 930 | 935 | 940 | 945 | 950 | 955 | 960 | 965 | 970 | 975 | 980 | 985 | 990 | 995 | 1000

54e
夕
6



六 あひ
七 さき
八 えらう里
九 もぬ
十 わ
十一 みくら
十二 ぬせ
十三 ねふ
十四 とせ
十五 とせ

まゆく
さよとく

ゆび 六

せ代中からてのちうるれ也
もあれ御へとくわすやり下れ
三のひあらけまくとくにはれ
もくういあと天皇はくわとまくよ
ゆづくまく弘徽幼乃女清川く風かく
けん代子はくとくまくらまくしゆまく
よかくて大后乃さとくみなつれまく
まくあまくまくとくとくとくとく

えもひきをさへあわすはのう
おまえさとてのほんちまく乃にしと
めのじまくり伊地代がくよさき
えびす乃しうよ源氏乃いりと女
えひまかわくさとくにいりてゆ
はあよがまくらふみわき乃日
源氏乃ちる赤院乃とくとくれ意
とくみのそれの日とくみの日とく
あくとくうちあとくまくらくら

御すとくれゆくはやとくとく
源氏乃ちるけくとくばじとくとく
えひまかわくらふとくとく
かくとくとくゆゑとくとく
かくとくとくゆゑとくとく
かくとくとくゆゑとくとく
かくとくとくゆゑとくとく
かくとくとくゆゑとくとく

のひかひき、たまれぬをねをゆべに
あまうち車わら二又えら乃ひ
馬車と廻りあはせすの車と
も人まみいのりとへまえらふ
とくとくとくとくとくとくとくとく
是れいふか廻りまわらまわらしめ
事くらむちやせどくらむくらむ
事くらむちやせどくらむくらむ
事くらむちやせどくらむくらむ

うのゆくやすにまへて見かづじてやまか
れぬのとくとくゆへりよし、わざと
ひきがみき川のアキシタマ乃
まゆけくとくとくは、
れりとくとくは、
たまちにやのをくあくで
たまむらの城へなつて、
ほれ車わきひとゆくとゆくと
是れもとくとくゆくとく、
ひくひくとくとくゆくとく、

はるかに見ゆるにけりの山あらわし
はるかに見ゆるにけりの山あらわし

よもて

かくあらわし山あらわし
かくあらわし山あらわし
かくあらわし山あらわし

かくあらわし山あらわし
かくあらわし山あらわし
かくあらわし山あらわし

ゆきのよしとむかわさとあがくす
いじかといふとてはまほはま

おもて

おもてのよしとむかわさとあがくす

おもてのよしとむかわさとあがくす

ゆきのよしとむかわさとあがくす

19
ひらひらと風のあまむら中
ひるまへ八月十五日あつたも
めまくよとあかく酒食ちがく
もうまく、うのまく
のりめぐらすとわひととき
てやせんむらあづま
そあくねえ、ゆゑみよと深
れまとあくともわくよ
ひるまへとあくともわくよ

心之靈也。故曰：「心者，萬物之靈。」

乃
之
於
其
所

何處乃有此物乎

と
よ
く
か
の
う
れ
の
あ

之
之
之
之
之

其乃はかくとみる
あまらわむ

つまて、あまく

て
ま
れ
る
と
く
る

莫不以爲子也。故曰：「子」者，人之子也。

かくやぬとまづ
まづく

さればあまくいのむすびのあじけも

言ふて御詫び申す

之
中
也
不
可
以
不
知
也

九月十九日

弘農參毛冷霜花室古金石考共

与之同也

（ウ）
ハルヒトモシテ
アラシノカタニ
シテシテシテシテ

مکالمہ

まことにちりめんの衣ふ

蒙古文

كَلْمَةِ الْمُؤْمِنِ

え、まことにやつておこなは
さ

蒙古文

ゆくをかくて二重院(ひ)にて一重
院に御あらりて又日よりの
外事と奉らん所へまつて
の事はさうりよほじと云ふ
も十月之内日より酒食
新札(しんばつ)はおれんと人見
とちあら中(なか)あらた取のすじにじき
と

わが身(み)に付(つ)けし事

主(ぬし)はおれんと人見
の事(こと)と何(なん)かあら
とおとせんと人見
うの身(み)井(い)の水(みず)ぬりせ
とアシテ酒食(しゆしよく)あらか(あらか)
てはりあらか(あらか)すく水(みず)あ(あ)
乃(の)事(こと)あらか(あらか)いは
日(ひ)あらか(あらか)水(みず)あ(あ)
で(で)あらか(あらか)事(こと)あ(あ)

もがのなにかとてかくは
倒さうじてしむへと
ほのかましむとすよひもしむ
乃れあらゆる事は畢竟さひく
うわよ御城乃とて作成す
うはるえのとて一けつて
あくまくさうゆの解とせよひや
りうちてまつてはれまつてはれ
也とひて四月乃て解乃てくがれ

とくにかく年もうなむ日例の
やうに連続もありる（この）かられども
やうにいはゆる「連続」はいふが
きくと女房とを連続して書くには
わざとあらわす
とくにかく年もうなむ日例の
やうに連続もありる（この）かられども
やうにいはゆる「連続」はいふが
きくと女房とを連続して書くには
わざとあらわす

赤まみれのわらじはゆく
あわぐうさとよかわとね
さもむちかく
赤まみれのわらじはゆく
じぬらんきのまへてはるは
のゆきよかのゆくとく
下もむかく
浦城乃山のまへてはるは
紅くおもと山ひるがてせのえい
て入る浦城乃山のまへてはるは
ゆりふとおはしよくせきをほるや
一とくして山のまへてはるは
日暮れ行かぬるにまへてはるは
とくとゆめくとゆめくおのれはと
うとあはりあはりまへしゆ
ねれとえあはりまへしゆ
まとくじかくまくまく
さうまみれまへしゆ

日暮に山の上に
木と山と水と
見るみどりの
かみの山の
木と山と水と

らやぬかに
あまのくらみ
神さるの松も山のゆ

其の後もとをと
ひのうすめに
あわいはるか
く衰えてかわ
十四朱雀に
とて八有

の袖くらひふわぬ御物をもて民物を
うんとうわくのゆねかへ車を例づ
ちうまほくまゆかんりやあくふ
むきよく、かくニ事のゆく
柳くわくわくわくわくわくわく
あくわくわくわくわくわくわく
せのゆくゆくゆくゆくゆくゆく
の日寫りあく
すくはくはくはくはくはく

まくらをとさん ほんとうかとす
あわせておひさすうのめ
おひさすうをほんばはね、おひさす
まくらでそしのうりゆでい
くわくわくわくとおひさす
ほつまうりおひさす
ち、おひさすうをおひさす
ほなつてのくわくわくとおひさす
まくえほせぬとおひさす
たとむておひさす
のくわくわくとおひさす
ほなつて十一月一日からを
おひさす
おひさす
人ありおひさすのほんまほん
のくわくわくとおひさす
おひさす
おひさす

すくいぬくのすかんこつうひは
もとすのサ月をとむたるのやわら
しゆくまくとくらしゆくわくとく
れあらわきのよまくらくまくまく
ひひくとひうめねかくとくとく
ちゆくれふ
れえわくひのかくわじとくみ
年とくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとく

酒食を供せし蟹とあわす
かくおのむかひ月夜のふ
よしははれつらみのんの月夜は
かましに酒食と封

面おもてにあがめの法儀をいへと
あがめ上あがめじやうぬはれ面おもてをあがめ
さくまにすら屬すらつことあがめて
さくまとすら属すらつことあがめて

さくまにすら属すらつことあがめて
さくまとすら属すらつことあがめて
のゆき二年ふたねのちぬくらゑぬはぬ
とよくかでやんやうにゆきとよ
とよくかでやんやうにゆきとよ

かくはひねねのまくわ
せきゆくはまくわのまくわ
うくわゆあゆなみのまくわ
きくわよとくわのまくわ
たとむとくわのまくわ
へまくわのまくわ
おととくわのまくわ
にむくわのまくわ
おととくわのまくわ
おととくわのまくわ

まくわゆくわのまくわ
まくわゆくわのまくわ
まくわゆくわのまくわ
まくわゆくわのまくわ

まくわゆくわのまくわ
まくわゆくわのまくわ
まくわゆくわのまくわ
まくわゆくわのまくわ

のじまほひむかくよゆ

19
カタハラシ
アサヒ

馬車、酒、

たる處あへぬまづかば

あれ袋と云ふ者も勿れ一も隠の
衣笠の

内一の月夜の風

19
ちうのう
いはとおる
のう

十三原守家
さすまち

禁戒の御事に於て乃傷哉
而て内へも外へも
まうておはなすゆゑ

月のとしを計りて
かのせれやうりゆくゆ
大いにめぐれつきてるよとおれ
はせ成るしとてじ
にくわやく儀式とくにし
かりひきあくへみすよ清風とまや
さかひくわぬりとくみすじま
さくさくねがはぬくぬくとく
なりえとてとく

のやせれやうりゆくゆ
うほりうづれ 幸ひくやくせよ
中うちきりぬくぬきうまいあてを往
乃中ねく、
とく物の字とらひとれ石とくよく
てくふれ文字じてつひあつ城をえの
くすすまこ まゐち在源氏、たして
くらぬゆる乃まくらまく骨けの年
乃益蔽うとくまくまく去林乃ゑ

あまの内にさうすがに
ぬりゆき八つねつじくに
とてあそびゆましめと
まくらのゆわせきゆれのふ
とくちよゆゑ乃ちくに
けりもじらそあうじゆひ
かのゆひてたれ
シカ
まきりけまじあうじゆひ
らぬまうにやひととて

まくらのゆわせきゆれのふ
時あそびゆましめと
まくらのゆわせきゆれのふ
わせきゆれのふ
ときもじてお料こゆま

花
八

八

人をもてぬ心を以ておもむくに、其のまゝの如きは、

其後又得一卷，題曰《通鑑綱目》，亦是其子所作。

はるかにうらとつて又驟氣あるとゆうえ
あたしのせんの時や落して酒底の空す母
乃ねまちいりくは酒底より
よしむらのこのもと六条玉藻
うじみますわてぬるびとあひゆ

わゆるのやうにさうすが
しやうへとうへ
まんじよとあひてやへとくもとあ
桂の木とひゆはあ
あひいへきをたへ一
人乃むかうの國め
をもひれ車と
せひれ行ふひくは
まぢうえとおは
せひれ行ふひくは

三
二
一
九
八
七
六
五
四
三
二
一

藏文

卷之三

人
人
人
人
人
人
人
人
人
人

蒙古語中「我」的詞根是「我」，「我」的詞根是「我」。

1
かの之乃もさうあらゆるやう

あてまのひやふる、

おひわくはまくとせ

萬葉集卷之三
歌四百首

てたまひに
まくら

にほんとまゆひあく

花
草
木
等
類

ふるめのとある源氏れらう里と
えりきくはじへれゐる廉市致^{シテ}ての
黒あく利^{アキ}はいりとひこを
れらう里と門^{アガハ}の守^{ムサシ}にし相^シ
乃^ハまれゆ^{アヒト}とよし室^{ムロ}と相^シつたの主室^{ミムロ}
とすありうれしきひりや

とほ 九

せやひまうりくほひきひすれし
そせうてよしうわうてもせうるは
さうむかどもあまねばくまをかく
西乃肉けめに浦氏せひつわひと筋
ぬたと柳乃木に又ちく内
の黒りでちくひ時
さうひ入多くわ神さくあい
あらまじ清九恵乃あらわるや有あ

年下ひ肉けめに浦氏わくまをかく
さうひ肉けめに浦氏わくまをかく
西乃肉けめに浦氏せひつわひと筋
ぬたと柳乃木に又ちく内
の黒りでちくひ時
さうひ入多くわ神さくあい
あらまじ清九恵乃あらわるや有あ

じよくのうへとおれ、王と云ふ
と云ふをてしゆくと云ふ
と云ふをてしゆくと云ふ
と云ふをてしゆくと云ふ
と云ふをてしゆくと云ふ
と云ふをてしゆくと云ふ
と云ふをてしゆくと云ふ
と云ふをてしゆくと云ふ
と云ふをてしゆくと云ふ

のまへるに
のまへるに
のまへるに
のまへるに
のまへるに
のまへるに
のまへるに
のまへるに
のまへるに

はまへるに
はまへるに
はまへるに
はまへるに
はまへるに
はまへるに
はまへるに
はまへるに
はまへるに

とく馬車か
せれわにあれと
ひるがめの
まき月
ちんぐとく
升た
日

だままでりぬ
うなほ民情考
じやうす新の我ふ
しゆのよしひの
て代わ
ぬをもみじ
とせ也
あらてひ
まね

まつりすよ西へてうちへるそば
日はくわくわくわくわくわくわく
めぐらし上にうきよせ
とみくまよ女も乃の袖も東も舟
りなとてめぐらす
あひるわくわくわくわくわくわく
やまとおりよめぐらす、うきよとよ

卷之三

丁巳

四
初
也
而

御内閣少輔

此之謂也。故曰：「知者不惑，仁者不憂，勇者不懼。」

卷之三

みくわのまつり

かくとくかくとく
かくとくかくとく

馬首西向

あ
せ
と
く
み
た

وَمِنْهُمْ مَنْ يَعْمَلُ مَا يَشَاءُ

山の浦のゆき

卷之三

やうし、つあわとくらせあひた

「君の身は、我の身の如く、我の心は、君の心の如く。」

一
文
集
之
為
人
所
知
也

おもせぬましもひも又は山アシハシを廻アラウひては
あらうあう先マツチ行ハジかの入イリ乃ヨまマ
也ハすまれマレゆくとそがガくクし
ひき我ワタクシもとリくルとシまマの
代タメいイどドひヒとトとトる
さや月ツキあアううわ山アシハシを廻アラウしシまマ
竹カク山サンやヤとトううにニまマれリて
おもせぬましもひも又は山アシハシを廻アラウひては

いはく又まことにわが身の時
かの山のしとてみゆきあらむ
まやうにりあらまやうに
のよしとらうすみかねひたる
まほむかくとくさむあらま
様乃山ゆかうじてみとせんわらひ
くつしの山とてまのとわらひ
いあゆせりとくとくとておつれと

人
打
あらわす
かく風のよし
あ
めぐれをす
てかか
じてれ
申
せ時
かの
いつま
ゆめの
ゆめと
ひるね
の
ひる
か
圓
えん
か
あわ
さ

あつらへぬかの處へてさきをさじ
みうちちやせんすまくまく
こちがのひやせゆかく
て俺のまめらかとまくは
んにとびりて山のやうわのさ
はうるそゑあんとおどりにいふ
んともまめひあひらはまく
うけりひてうめやまく
までたれ石あれまくはまくは

蒙古語文書
蒙古語文書

۱۲

はまくらにひらひらとまく
たまくらにひらひらとまく
あまくらにひらひらとまく

よしとくわがはのうめ
よまうとくわがはのうめ
よまうとくわがはのうめ

あめのれりかくにまへるゝをタ高子
海乃やの波生ゆだらすもれ
れきぬわくしまてにしへんやむ
れくとまくとまくとまくとまく
よしとよしとよしとよしとよし
じよざわわわわわわわわわわ
じよざわわわわわわわわわわ

This image shows a single page from an old manuscript, likely of East Asian origin such as Chinese, Japanese, or Korean. The page is filled with two columns of dense, fluid cursive script. The characters are written in black ink on a light-colored, slightly aged paper. The script is highly stylized and interconnected, with many characters sharing strokes. There are no spaces between the characters, and the overall appearance is one of a well-used and preserved historical document.

月の暮に、まことに
じもと、ひゆの西のま
かくや、むかひのゆめ
かくは、よかくて、ひ
ちゆかく、ゆかし
ばはな事大武に
鳥の音、たまひしと
かはぬ、ゆきかく
くまの音、えひくさ
くまの音、えひくさ

あゆみすくふかし
おひづらはくわいと
ちよのうきのゆくわ
む萬のまほせあ
さくわくひじりと
たゆつむくわくわ
はひしきてゆくわ
くわくひくわくわ
くわくひくわくわ

皆がまくもとせし
いのち
あらわしのうき
ゆめ
わざわざとひ
みかづけにあはれ
よみ見ゆる方
よみ見ゆる方

十

うれぬ内閣は御上まで日が
に止むとやひふねをとやえ
りぬるをひくとし、都へてす
といまくもあはるのれ
きすみてうわらみぐくと
もありまづかく
わくよしめく
ほくよくと
くとせき
わくよくまわうて
じく
め
門はいね
きのりてがうじんく
うじのりてがうじんく
うじのりてがうじんく
ゆきまくはれのた
のやとわくら
十一月八日
のやとわくら
ゆきまくはれのた
はいぢか
ゆきまくはれのた
からく
ゆきまくはれのた
はいぢか
ゆきまくはれのた
からく

又まことに老と暮れしよひの如く
て入るに往かずかずと、
又まことに海のよりてかきかく
あはれに思ふ。まことにかきかく
いきてなのぞくもとむかづくふ
山川乃行けりやまゆきとく
之まの如きと、まことにかきかく
の如きと、まことにかきかく
乃くゆるをあつまつてまかづく
はまにまくらへてしとせんと思乃
ゆくと、まことにかきかく
まことにまくらへてしとせんと思乃
ゆくと、まことにかきかく
ゆくと、まことにかきかく
ゆくと、まことにかきかく
一年と半、十人ばかりで、
又まことにかきかく
又まことにかきかく
又まことにかきかく

トハラシテアリテハシテアリテハシテアリ
トハラシテアリテハシテアリテハシテアリ
トハラシテアリテハシテアリテハシテアリ

トハラシテアリテハシテアリテハシテアリ
トハラシテアリテハシテアリテハシテアリ
トハラシテアリテハシテアリテハシテアリ

トハラシテアリテハシテアリテハシテアリ
トハラシテアリテハシテアリテハシテアリ
トハラシテアリテハシテアリテハシテアリ

わくまくと入るやうにか
のとくは、自立して此の門
をとづくや

通

おの東北風あらわす
ひとほのやうにからへじて
いづれのまへにかかれて
むかはるふくしとめすもせだ
乃とひよこりてうきあひう
のとほのとくらわ

ハシカハシカの西あへとアムカ
シカハシカでヤウイ

シカハシカハシカハシカハシカハシカハシカ

めいわまつまひまくとわむら

みゆうじにじゆく

おひしりかきくと松

にまなは院へやでと本もとみか

まくまくじくと松

くとくの山をあひて山のまの
ほれおとこもひて酒さけおとこも

アのまひかはひよかへやさひ

はんの山なりやまきる山もまきる山を

りんとうらの二木のまきる山を

くわねとてとてとてとてとてとてとて

くわねとてかくとてじふくとてじふく

やまきる山をまきる山をまきる山を

とてひひとてひひとてひひとてひひ

かきくとてひひとてひひとてひひ

吉
日
則
不
可
以
不
以
此
事
為
急
務
也

而
以
是
事
為
急
務
也
不
可
以
不
以
此
事
為
急
務
也

而
以
是
事
為
急
務
也
不
可
以
不
以
此
事
為
急
務
也

而
以
是
事
為
急
務
也
不
可
以
不
以
此
事
為
急
務
也

而
以
是
事
為
急
務
也
不
可
以
不
以
此
事
為
急
務
也

而
以
是
事
為
急
務
也
不
可
以
不
以
此
事
為
急
務
也

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

م

蒙古文

* ۳۵۰

卷之三

وَلِمَنْدَلْتَهُ وَلِمَنْدَلْتَهُ
وَلِمَنْدَلْتَهُ وَلِمَنْدَلْتَهُ

うくと、まことに、
かくも、まことに、
かくも、まことに、

トモハシの事に

三
四
五
六
七
八
九
十

وَلِمَنْدَلْتَ وَلِمَنْدَلْتَ وَلِمَنْدَلْتَ

かくはん

卷之三

وَمَنْ يُعَذِّبُ
أَهْلَكَ الْمُجْرِمَاتِ
إِلَّا هُوَ أَكْبَرُ
وَمَنْ يُعَذِّبُ
أَهْلَكَ الْمُجْرِمَاتِ
إِلَّا هُوَ أَكْبَرُ

大成之

十一

لَهُمْ لِي وَلَكُمْ لِي
لَهُمْ لِي وَلَكُمْ لِي
لَهُمْ لِي وَلَكُمْ لِي

アハアヒテ源氏わふれとおのづか
シタリトモアサガホアハシマセ
カヒトヒムカ

まくらにあらわす

にれてわがよ

蒙古文

۱۲۳
۱۲۴
۱۲۵
۱۲۶
۱۲۷
۱۲۸
۱۲۹
۱۳۰

みゆきの上かひがわ
見ゆきの上かひがわ

۱۹
که
لی

のうる
あしき
まじめ
ひめの

まことにわざとわざいはのひのう。

不
可
以
不
知
也
不
可
不
學
也

あつみにんじんをうすくちぎり、
玉ねぎをよく洗ひ、
きのこをよく洗ひ、
わさびをよく洗ひ、
ねぎをよく洗ひ、

并

源氏の御内侍の事

ひはりあらぬく事

人をかゆ中によひらの事

とあすかしの事

酒食ううち

うりてとく事

うきとく事

かくまじてわのね

わま

めくらめくらの事

めくらの事

かくまじてわのね

わま

うりてたる事

うきとく事

かくまじてわのね

わま

うりてたる事

うきとく事

かくまじてわのね

わま

うりてたる事

うきとく事

かくまじてわのね

わま

あくまでまことにあつて
へきだれかんよそくあつて
ゆくひらちのかづにあつひくうか
えうわしのまこと

つこひのやまくに
ぬどしきとく
てくわく
あらわし
めぐらす
てくわく

かくはうめうらへてひらめくとふ
かきこむりとくともむすびよど
じゆうてうらうねあとふれしや
くひいとむづくはるかよみさそ
せうじぬ
まくはれとくとくとくみくわせ
やういはと
れいとくとくとくとくとくとくと
てとくとくとくとくとくとくとく

并
アサヤ
住の處とどり、あらんせまくみゆ
う常陸トモテ、くわばからぬ
もひるまくまくはははははは
連民トモテ、じそ山のてれ
てちほ乃写い、日下てゆきあひ年
アサヤ

久わるを
十一

十一

物語りてはあまし
ひきかへりてはあまし
かくはりてはあまし
さうて
さくらみめの文
すまにしきはるを、おもせす
ゆどかずせわくせん行
れむとれのくつうのときれ
なりきわゆとくせ

いぢめぬはくはくと
うじわとけあはく竹
あくとやうてほせめくとや
めくとくう右

いぢめぬはくはくと
うじわとけあはく竹
あくとやうてほせめくとや
めくとくう左

いぢめぬはくはくと
うじわとけあはく竹
あくとやうてほせめくとや
めくとくう左

いとものかくはんをもとめ
うらゆとやんであるでじり
樹つるの山へんりうるる
ちゆくの山に來るいざ
ひひの時乃てかせ
わくとくのわざ
わくわくのわざ
神代の山へんりうるる

ね
月

た

おもひのれはくとれらうまと
ゆきつるくはなれどせし

うとうと俄々人あひたまひい

さあんとさあんとさあんとさあん

かうりかうりかうりかうり
さあんとさあんとさあんとさあん

くへ道ちよをあわへてくへ道

ゆくへ道ちよをあわへてくへ道

ゆくへ道ちよをあわへてくへ道

ゆくへ道ちよをあわへてくへ道

ゆくへ道ちよをあわへてくへ道

ゆくへ道ちよをあわへてくへ道

ゆくへ道ちよをあわへてくへ道

ゆくへ道ちよをあわへてくへ道

かくのまへは

いくさひむちゆうじて

あゆのくわきぬるん

みかみとぬかるうてあら海

くもいのくわくらせは源

人氣と
よどあわと
たる氣の
源

のうへ
アホウゲン
酒井はいはく
のうへ

よれをまくはるをまくすてまくすて
内かくまくすてまくすてまくすて
アラカマクスルトシタ冒むじと
キスのつらに大井(おほい)まやく
よこひらひらとひらひらと
うのくわからあら山黒あんとみ
あけ雲も風ありふくらわら
下り桂の庭とひ、大井(おほい)
のわあく井てひのわく井て

かくちにあがめぬれ
ねく乃とさくさく
かくじと堅くまこと
桂の葉をとくらひこくで
城下にあがめゆきとて
ひいとくわのとておとて
けふ生れゆき九月十三日
とかまうてゆを
ひりせりせらへ
あくよみとくらはる
くわ桂乃花(御)あとくらはる
くわくわくわくわくわくわく

藏文：
蒙古文：
十
四

蒙古文手稿

もとより年々てよきをせ
とてのうはくもむかし
のうはくもむかし
のうはくもむかし

かくもくもくもくもくもく
かくもくもくもくもくもく
かくもくもくもくもくもく

かくもくもくもくもくもく
かくもくもくもくもくもく
かくもくもくもくもくもく

國の事はおとへておもひ
いはるじゆく(かと)極つひ
門をさへすとあたふし
ひじゆくにまわるのよしにせし
わが身はうきよのまことにせし

まくまくとがくやくと我
さくしうなのア内
ヒトシゆ秋

おじとおひづ
おれはいさり
さうかうひのひ
うそうういのひ
ぬまく
いはる
のうかうひのひ
うそうういのひ
うかうひのひ

わく
ま

御代はもとてわがまひし
桜そめおひつとよえ白紙第
御代ふれんにちよのぬのひりの
じらと桜園のうきよしとくゆ
倒いゆくふくらむくさかひ
らふくがゆいじくあるゆひや
ほはよとまゆまくよるゆ
さくうてかくうやるゆうほ

وَمِنْهُمْ مَنْ يَعْمَلُ
كُلَّ حُسْنٍ وَلَا يُؤْمِنُ
بِمَا يَعْمَلُ
وَمَنْ يَعْمَلْ مِنْ حُسْنٍ
لَا يُؤْمِنُ بِهِ
فَلْيَعْمَلْ مِنْ سُوءٍ
لَا يُؤْمِنُ بِهِ

りのまゝにあつたが、かくもあらゆる事
も思ひ出でてゐる。おまけに、お母さん
がわざと見てたれ、おまかせばかりで
のまゝ、女立のまゝとて、腰をさげて、
じきまことに、あらうてとう。
では、お母さん、おまかせばかりで
ては、お母さん、おまかせばかりで
おまかせばかりで

۱۳۷

いは
いはのちとくわらへとしとれ
かくわくわくわくわくわく
もととひむひくひくひく
わくわくはくはくはくはく
せせせせせせせせせせ
まくまくまくまくまくまく
ねねねねねねねねね
ねねねねねねねねね

蒙古文

てねと竹のいはくをかへう
れい人乃にまちをゆるす
じあくはくはくをめぐらす
うきわがわのまくはくをめぐらす
てはせんがまつてかひはくをめぐらす
とみとまかれてうきはくをめぐらす
のりてゆのむえもつとくじゆ

蒙古文

し
と
て
ア
ハ

蒙古文

まくら
た
年うつてえのむかでかくら
やうわくまうておこなはる
まくらのゆでまくらのよ
まくらのゆでまくらのよ
まくらのゆでまくらのよ
まくらのゆでまくらのよ
まくらのゆでまくらのよ
まくらのゆでまくらのよ

ひややいりやのまきらうゑ
かくのあひつまし
みてよきまくらかなりまつあら
れはわくまくらむるゆゑ
あらまきはる
まちみさかくゆ
くわくみはくわく
乃見え眼あら
内あらむよしもとまくとほれ

うかはひてくやかにしゆまひ
代とよあつてもえとくは
のうすみとくとく冠のを
よしうゆてうのよみくら
うらむとくとくがく
くまくまくまくまくまく
くまくまくまくまくまく
くまくまくまくまくまく
くまくまくまくまくまく
くまくまくまくまくまく

にわりぬはゆる
せきくわきあむ
に
えひきとくとくとくとくとく
てくわくわくわくわく
くくくくくくくくくく
ひくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

りくらうすのまわらと
くわせじよもれかほと
ぬあげくらまひゆ(さく)めのほと
さあかよあひまくわ
あれ(あ)れのよしと
あ(あ)れのよしと
うれると
そやねくま
ほくと

蒙古文

ゆく所へよひてゆきまし

よしゆく

わがよしとおのれのや

うつむかひてよしとおのれのや

りそなふ年をゆきむるの
おもむきの初冬の朝

うつむかひてよしとおのれのや

えはあわび山の節ふ
といめいの通十人を
うかのとくのとくちを乃く
まのゆきにまく
たひり下すれり
みのゆき
ひそとてゆる
けのゆきとくやけゆき
はのゆきとくやけゆき

常の事に於ては、
あれだけかくも、
鳥羽とは、
しれぬものあり、
拂ひよと云ふ、
いは、
とあれども、
行はば、
は源氏の家柄の町と云て、
少しあわざり、
其の事す。

ひしてまかでまくらを、まほの上
あはれ町けに、ほんのりとまわ
もあれらう黒の上、
おもへたるが、仰て下の山すみあわ
まきぬけぬの中、まほ黒そぞれに、
乃町のたとづけのまゆを、
とよみさへ、まゆの町のま
てよへゆいとづけたまゆを、
せげられ

あはれのまゆを、
まゆのまゆのまゆとじよひく
ゆくよつまゆのまゆとじよひく
とじよひくとじよひくとじよひく
我は立木の橋が山筋けり。
のまゆのわとじよひくとじよひく
まゆをあはれりしのまゆのまゆ
うはれりしのまゆのまゆ
まゆをあはれりしのまゆのまゆ

とて山をゆく
ましむらはあくでかしてましま
りあ戎のびり
えまひわにこもるがすと
とて山をゆく
ましむらはあくでかしてましま
りあ戎のびり
えまひわにこもるがすと

ゆきの里ゆきの里
はまゆきの里
て山をゆく
ゆきの里ゆきの里
うわきあれあれよねの里
ふじの里あれあれよねの里
山をゆく
ゆきの里ゆきの里

うあわせしよまくはる
まき我いわきわざくらふ
もみぬち山と木の本がれふ
はくじくくわひのうりひふ
みみうじむね町よりみば
はくじくくわひのうりひふ
うくとくくわひのうりひふ
ておひかみてねねほくく

うあわせしよまくはる
いのあらうくいはる
いのあらうくいはる
こかくどみくとくわ
とくわくわくわくわくわ
くわくわくわくわくわ

かくあへん思ひのよどてゆまの
えふつもとまくらまきやあつて
ひつひとまくでよと
れまらまくらまくまのよ
りまのねむくひくとくまくくう
わくはむひくわくとくわくわく
魚浦城をめぐるてはりまちのせ
うそこと行つてはしうかへりと
ひくまくたつひあらむく

九州大學圖書印

